

会員の皆様、こんにちは。

5月7日、フランス大統領選決選投票が行われました。マクロン候補トル・ペン候補の一騎打ちの末、39歳の若きマクロン大統領が誕生したのは、日本でも大きく報道されたため、記憶に新しい方も多いのではないでしょうか。

今回、識者から寄せられた話題は、「どうなる？フランスの政治」がテーマです。経済の低迷や、国内で相次ぐテロなど課題が山積する中、若きマクロン大統領はどのようななかじ取りをするのでしょうか。是非、ご一読下さい。

石田まさひろ政策研究会

どうなる？フランスの政治

■ 39歳の大統領の誕生

今年の4月から5月、フランスでは大統領選がありました。弱冠39歳のエマニュエル・マクロン（お菓子のマカロンではありません！）が大統領に当選、しかもファースト・レディとなった24歳年上のブリジット夫人は、マクロン大統領の高校時代の先生だったとニュースに取り上げられることもあり、大統領選に興味を持った方多かったのではないかでしょうか。そこで、今回の大統領選で何が起きたのか、少し掘り下げて話をしようと思います。

■ フランスの大統領制とは

フランスでは、(1) 国民議会（下院）の議員は、選挙人登録された国民全員の投票で選ばれ、(2) 元老院（上院）の議員は、市町村議会議員を中心とした選挙人団の投票で選ば



ブルボン宮殿（下院）



リュクサンブル宮殿（上院）

れますが、これに加えて、(3) 大統領が選挙人登録された国民全員の投票で選ばれます。大統領は、首相指名権限や国民議会の解散権

を持つなど強い政治的権限を有しており、これが、フランスの政治制度の特徴です。

■ これまでの大統領選

フランスの大統領選では、これまで、右派候補と左派候補が最有力候補として決選投票で闘う、というのが基本的な構造でした。一方で、2002年の決選投票では右派のジャック・シラク候補と極右の国民戦線のジャンニマリー・ル・ペン候補の争いとなる等、伝統的な右派・左派の対立軸に加え、極右政党の台頭という要素が加わるようになっていました。

■ 今回の大統領選はここに注目が集まった

ところが、今回の大統領選では、(1) 左派の前オランド大統領の支持率が低迷し左派のアモン候補に支持が集まらず、(2) 右派のフィヨン候補もスキャンダルが発覚して支持を失い、(3) 左派でも右派でもない新機軸で大統領選に臨んだマクロン候補の支持が急速に拡大するという過去に例のないことが起きました。一方で、英国の国民投票におけるEU脱退の選択、米国の大統領選で保護主義を主張したトランプ候補の当選があり、こうした動きと機を一にして、フランスのEU脱退の可否を問う国民投票を主張した極右国民戦線のル・ペン候補への支持が集まっていました。つまり、今回の大統領選では、従来の右派・

左派とは異なる軸の台頭とともに、EU賛成・EU反対の対立が際立った選挙でもありました。そして、その結果は、右派でも左派でもない、EU賛成のマクロン候補がル・ペン候補に決選投票で勝利し大統領に当選した訳です。



パリ市内に貼られた候補者のポスター

■ フランス政治の今後

マクロン候補は、昨年来、政党「共和国前進！」を結成し、今年6月の国民議会選挙では、577議席中308議席を獲得、連立を組む「民主運動」と合わせ350議席を獲得して圧勝しました。これによりマクロン大統領は、強い政治基盤を確保したわけですが、大統領選挙後に既に支持率の低下が起こっていると報道されており、構造改革・経済成長・財政健全化のための施策を果斷に実施していくのかが問われています。バカンスシーズンの今は比較的静かですが、秋になれば、デモやストライキなど、騒々しくなるかもしれません。フランス政治の動向には引き続き注意が必要そうです。

著者 IK

Seki-shin 石心 石田まさひろ政策研究会メールマガジン vol.015

このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。ご意見は info@masahiro-ishida.jp までお寄せください。

【配信停止・設定変更】本メールサービスの解除を希望する方は、石田まさひろ政策研究会までご連絡ください。

【配信元】石田まさひろ政策研究会 〒100-0014 東京都千代田区永田町2-1-1

Copyright© Masahiro ISHIDA all Rights Reserved ---掲載記事の無断転載を禁じます---